里山にキュン!

緑いっぱいの里山に注目!

北部エリアに起こる ニューウエーブ

藤沢にせっかくやって来ても、観光客が訪れるのは江の島の周辺ばかり。江の島からはちょっと遠いが、藤沢の北部エリアもなかなかおもしろい。北部エリアは農業や畜産業が盛んで自然豊か。その土地柄を十二分に生かした取組が、すでに始まっている。

キュン! 8

関東エリア最大規模の都市部でのロードレース サイクルチャレンジカップ藤沢

2014年から始まった藤沢発のロードレース。スタート・ゴールは慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで、ソロ、2人チーム、3人チーム、4人チームに分かれ、3時間で1周4キロ弱のコースをどれだけ回れるかを競う「3時間エンデューロ」を行う。2015年度の大会は前回より130名定員を増やし約600名が参加した。選手は緑多い会場周辺の道路を走行。坂道もあるが、北部地域の自然を満喫できるレースとして、自転車愛好家に根づきつつある。会場では、野菜など、地域の物産や藤沢産の食材を使った料理を販売。北部地域の魅力を参加者、観覧者に発信するイベントにもなっている。

サイクルチャレンジカップ藤沢 コース

※上記コースはサイクルチャレンジカップ藤沢2015開催時のものであり、今後変更になる場合があります

©POWER SPORTS

キュン! 9

ふじさわやさいを作る仲間たち ゆるやかな「縁農」の輪が広がってます

身近に農地がある環境を生産者と消費者で支えあう 相原農場　相原 成行 さん

「ふじさわやさい」とはブランド名ではない。藤沢を中心に、縁でつながった有機農家たちのゆるやかなネットワークだ。最初は個々の農家が作った野菜を一緒に直売所で売っていたが、仲間が増え、対外的にもグループ名があったほうがいいということで、5年ほど前、「ふじさわやさいを作る仲間たち」という名を付けた。参加している農家は、藤沢近隣を中心に22軒。宮崎県の農家も参加している。ふじさわやさいは、「藤沢に縁のある人の野菜」という意味だからだ。藤沢市内のあちこちで定期的に直売を行っている。

このネットワークの中心にいるのが、藤沢市宮原の相原農場の相原成行さん(48)。母親の病気をきっかけに、相原農場は1980年から有機農業に取り組み始めた。1998年からは農業研修生の受け入れを開始。これまで70人の農業研修生を受け入れ、60人の有機農家を育ててきた。「募集したわけではないけれど、噂を聞いて毎年途切れずに全国から希望者がやってくる」と相原さん。新規就農者の中で、有機農業を目指す人は徐々に増加している。

相原さんは「身近なところに農地があることの大切さを、今はなかなか感じられなくなってきている」と話す。神戸で震災に遭った人から、「食料が全国から届き始めるまでの1週間、命をつなげたのは、周りにある農地のおかげだった」という話を聞き、自分の住んでいるすぐ隣に農地がある幸せや、だからこそ大切に守っていかなければならないという思いを強くした。「農家がやっていることを伝えられるのは農家しかいない。直売所でのお客さんとのコミュニケーションやお手伝い、研修生の受け入れもその一環。消費者と生産者が力を合わせて藤沢の農地を守っていけたら」。それが相原さんの目指すところだ。

土も人も有機的にかかわる…本当の有機農業を目指して にこにこ農園　井上 宏輝 さん

藤沢市北部、田園風景が広がるエリアに「にこにこ農園」はある。70a(=7,000㎡)の畑には常に80〜90種の野菜が育つ。井上宏輝さん(38)の作る野菜は力強く、味が濃い。「ここの野菜にはすべて生き物がかかわっています」と井上さん。井上さんも相原農場の研修生だった。元々は特別支援学校の先生だった。「高校3年生が旅立つとき、“卒業おめでとう”って感じがなくて。彼らの次のステージを作りたい」と農園を作るべく、30歳で農業の道を選択した。農業高校を卒業し、大学で微生物の研究をしていた井上さんが目指すのは、農薬や化学肥料に頼らない有機野菜を作ること。自然界にある微生物が土を作り、人が耕し、収穫する。現在、障がいのある方2名を含む4名と、賛同してくれるボランティアで運営する。

有機農業を始めて8年、次に井上さんが目指すのは地域のワークステーション。「障がいのある人はもちろん、おじいさんもおばあさんもちょっと働けたらいいでしょ?農業にとらわれず、子どもが預けられたり、ご飯が食べられたり…地域のみんなが必要とし、集まれる場所。そんなのがあったらいいよね」。高齢化が進む農業の未来を見据え、地域の皆の力で、次世代につなぐ農地を保ち、地域を守るというモデルを目指して模索中だ。

問い合わせ TEL0466-25-1111 内線2173(藤沢市企画政策課シティプロモーション担当)　藤沢　キュン　検索